

## 人間の学習の歴史的形式としての学習活動の出現

## 1 活動の三角形

一九世紀に、哲学、生物学、そして社会科学は根本的な概念的・方法論的躍進をとげたが、それは、産業資本主義による生産力や地球規模の交易の大規模な発展と、直接的・間接的に結びついたものであった。哲学における躍進は、わけてもヘーゲルによってなされた。生物学においてはダーウインによって、また社会科学においてはマルクスによってなされた。

これらの躍進には、はっきりと二つの基本的特徴が見られる。第一に、有機体と環境、人間と社会は、もはや分離した存在としてではなく、遡及的な (retroactive) 因果関係をもち、たえず内的に動的に移行している統合的システムとみなされていることである。第二に、有機体と環境、人間と社会は、もはや静的で不変の存在ではなく、質的に転換していくものであり、歴史的なパースペクティ

ウを必要とするということを理解することが初めて可能になったということである。

三つの躍進には、それぞれに特殊な内容と影響があった。もっとも一般的に言えば、ヘーゲルの寄与は、次のように要約できる。

自分自身を確固とした民族的伝統（カント、フィヒテ、シェリングなどのドイツ啓蒙思想）のなかに置くことによって、ヘーゲルは、当初から、人間意識の能動性を、ヒトの身体的・自然的組織の特異性と結びつけるのではなく、先行の歴史によって蓄積された精神的財を人が能動的に摂取する過程、および対象（の抵抗）を克服しようとする自身の活動において同化してきたものの具体化と結びつけた。（Mikhailov, 1980, p. 87）

ヘーゲルは、物質的・生産的活動と労働の道具が知識の発展において果たす役割に注意を向けた最初の哲学者であった。個人の意識というものは、知識——社会によって蓄積され人類によって創造されたモノの世界のなかに対象化されている知識——の影響の下で形成される、という理論を彼は明示した。

人は、歴史の精神が彼を所有してきた限りにおいて、つまり歴史が彼の内で、彼を通して作用する限りにおいて、意識（精神）を所有しているのである。（Mikhailov, 1980, p. 92；ヘーゲルの心理学的な重要性に関する最近の解釈については、Markova, 1982を参照）

一方、人間のシステムの・歴史的把握のための自然科学的・経験的基礎を築いたのは、チャールズ・ダーウィンであった。

内的構造と外的環境のあいだの対立する力を調整することによって、ダーウィンは、科学的説明を行うさいに超自然的な方に訴える必要を排除した。彼は、漸進的に変化する自然の自己充足的なシステムについて、初めて有効なモデルをつくりだしたのである。(Richards, Armon & Commons, 1964, p. xx)

ハワード・グルーパー (Gruber, 1974, p. 71) が、そのすぐれた著書『ダーウィンの人間観』のなかで書いてるように、マルクスとエンゲルスは、「種の起源」が出版されたとき、熱狂的に迎え入れた。マルクスとエンゲルスは、ヘーゲルの洞察とダーウィンの洞察を結びつけた。そればかりでなく、彼らは、人間が、たんに進化の産物や文化の同化者であるだけでなく、その創造者であり変革者でもあるというとらえ方を打ち出したのである。

これまでのあらゆる唯物論(…)にみられる主要な欠陥は、事物 (Gegenstand)、現実、感性が、ただ客体または直観という形式でのみとらえられていて、感覚的・人間的な活動・実践として、つまり主体的にとらえられていない、ということである。そのために、活動的側面は、唯物論とは対立しつつ、観念論によって抽象的に展開される。もちろん、観念論は現実的・感覚的な活動をそういふものとして認識しないにもかかわらず。(…)

環境の変化と教育に関する唯物論的な学説が忘れてゐるのは、環境が人間によつて変えられるし、教育者自身が教育されねばならない、ということである。それゆゑに、この学説は、社会を二つの部分に——そのうちの一方が他方に超越しているものとして——分けざるをえない。

環境の変化と人間的な活動または自己変化との合致は、ただ革命的な実践としてだけとらえることができ、合理的に理解することができぬ。(Marx, 1976, pp. 615-616)

この有名な「フョイエルバッハのテーゼ」の文章は、探究をさらに進めていくための規準となるものである。問題は、二〇世紀の人間科学、とくに心理学や教育学が、「環境は人間によつて変えられ、教育者自身が教育されねばならない」という過程を把握し実現していくための一貫した理論的用具をまだ構築できていない、ということである。ビブラー (Bibler, 1970, p. 157) が指摘しているように、ヘーゲルやマルクスによつて予見された概念的提起は、「いまや生産活動一般に妥当し、論理的必然となつてゐる」にもかかわらず。

一九世紀の科学の躍進において提起された課題はまだ実現されてはいないが、二〇世紀の思潮のなかには、それを正面から扱つてきたものもある。こうした思潮は、人間という概念を、システムの歴史的存在として真剣にとり上げた。その原則にたつて、人間活動の基本的構造をモデル化しようとする試みを生み出してきたのである。

人間活動について実りある基礎モデルを探索するために、私はまず、以下のような制限条件を設定したいと思う。

第一に、活動は、もつとも単純で、発生的にも原初的な構造の形式によって——つまり、どんな複雑な活動の背後にもある本質的な統一性と質を保持した最小の単位として——描かれねばならない。

第二に、活動は、そのダイナミクスと転換において、すなわちその進化的・歴史的变化において分析されねばならない。静的あるいは永久的なモデルは有効ではない。

第三に、活動は、文脈的あるいは生態学的な現象として分析されねばならない。活動のモデルは、個人と外界のあいだのシステムの関係に焦点を合わせなければならぬ。

第四に、とりわけ人間の活動は、文化的に媒介された活動として分析されねばならない。二項的な有機体—環境モデルは十分ではない。この要件はすでに、人間活動が文化的に媒介された三項構造あるいは三角構造をもつとしたヘーゲルの主張に発している。

最初の制限条件によって、たとえばハーバーマスの研究は、当面の議論から除外されることになる。ハーバーマスは、研究の出発点から、原初的な内的統一性をみるのではなく、行為を労働と相互作用に分割するという方針をとっている (Giddens, 1982を参照)。

また、最後の制限条件によって、たとえばピアジェの活動概念を考察する必要はなくなる (Piaget, 1977 および Gallagher, 1978を参照)。洞察に富んだ批判については、特に Damerow, 1980 および Wartofsky, 1983を参照)。

以上四つの要件をみたす人間活動の理論にとって必要なものが、三つの研究的伝統のなかに見いだされる。第一の伝統は、パースに始まり、オグデンとリチャーズによって拡大され、ポパーの進化論的認識論にいたる、記号・意味・知識についての理論化である。第二の伝統は、G・H・ミードに

よって基礎づけられ、幼児のコミュニケーションや言語発達の研究のなかに受け継がれている、間主観性の発生についての研究である。そして第三の伝統は、ウィゴツキーに始まり、レオンチェフにおいて熟成した、文化・歴史学派の心理学である。これらの理論すべてにおいて、媒介の概念、つまり第三項あるいは三角構造の概念が、人間活動の構成的特徴とみなされている。この考え方は、図示的なモデルのかたちで、表現され、展開され、応用されることが多い。

## 2 「第一の思潮——パースからポパーへ」

記号論の創始者のひとり、C・S・パース<sup>\*</sup>は、対象、心的解釈項、記号のあいだの三項関係という考え方にもとづいて、媒介の理論を打ち立てた。

<sup>\*</sup>パースの著作 (Peirce, 1931-35を参照) は膨大で不明瞭な点もあるので、ここでは、明確化をはかるために、パーメンタイア (Parmentier, 1985) の簡潔でバランスのとれた解釈のみに拠って、考察を行う。フアリーズ (Pharès, 1984) の関連著作も参照されたい。

記号、あるいは表意体 (Representamen) は、第一の項であり、対象 (Object) と呼ぶ第二の項、そして同様にその対象に対する同一の三項関係を仮定することにより、こゝで解釈項 (interpretant) と呼ぶ第三の項を決定することができるような、純粋な三項関係にある。(Peirce, 1902; Par-

この三項関係は、独立した二項には還元できない。還元されてしまえば、三項のダイナミックな性格は破壊され、「初期のモメントの結果として生じるモメントによる解釈も表象もなければ、要素間に存在するシンボリックな関係や慣習的な関係もない。そしてまた、その過程では、どんな思考・観念・意味も具体化されたり伝達されたりすることがない」(Parmentier, 1985, p. 26) ことになる。

このダイナミズムには、二つのベクトルがある。第一には、記号と解釈項から対象へと向かう表象のベクトルである。第二には、対象から記号と解釈項の両者へと向かう決定のベクトルである。

表象と決定の二つのベクトルの結びつきが意味していることは、記号関係における三つの要素が、永久に変わらず、対象・表意体・解釈項のままなのではなく、むしろ、決定や表象が具体化されるに伴い、互いに役割を交替することである。(…) こうして、記号現象 (semiosis) は、「無限の過程」、あるいは「終わりなき系列」となる。ここでは、各モメントにおいて決定が蓄積されるに伴って、解釈項が対象についての真の表象に近づいていくのである。(Parmentier, 1985, p. 26)

パースは、純粹に論理的・言語的な実在にだけでなく、人間の行為にも、彼の概念を適用した。

理性に支配された行為のすべてにおいて、こうした真の三項性 (triplicity) が見いだされるだろう。

一方、純然たる機械的行為は、要素間の対で生じる。男が妻にプローチを贈る。行為のなかの単純に機械的な部分は、男が何か音を発しながらプローチを置き、妻がそれを取り上げることからなる。ここには、真の三項性はなく、物を贈るという行為もない。物を贈る行為は、ある知的な原理がプローチと妻の関係を支配していることを男が認めているということのなかにある。アラビアン・ナイトの商人が日付石を投げつけ、それが魔人の目を一撃した。これは純然たる機械的行為であり、真の三項性はない。石を投げることと一撃をくらわすことは、互いに独立している。しかし、彼が魔人の目をねらったのであれば、そこには、たんに石を投げること以上のことがあつただろう。真の三項性があつたろうし、石はたんに投げられたのではなく、目をめがけて投げられたということになる。ここには、意図、精神の行為が入ってくることになる。知的な三項性、すなわち媒介 (Mediation) は、私の第三のカテゴリーである。(Peirce, 1902; Parmentier, 1985, p. 41 から引用)

この引用は、パースの概念把握にみられる第一の根本的問題を示している。媒介的記号は、ここでは、人間の行為の文脈のなかにあり、何か純粹に心的・意図的なものとして扱われている。こうして、媒介的記号から、反デカルト主義的な文化的な質の可能性が失われ、個人主義と合理主義に逆戻りするのである。

パースはしばしば、表象という考えが、精神的なものであれ、非精神的なものであれ、何らかの属性をもつものならずべて含むと明記しているが、非精神的なカテゴリーにおける記号の感覺的・物質的な



質——彼が後に表意体と名づけたもの——にはほとんど注意を払わなかった。事実、「外的表現の媒体」に対する要求は、他者に対して「思考・記号」を翻訳するのに必要なものとしてのみ認められている。そして、この物質的な質は、本来、記号の表象機能において何ら積極的な役割を果たさない、記号のもつ非記号論的特性の残余にすぎないのである。(Parmentier, 1985, p. 33)

パースの思想における第二の問題は、彼の研究歴が終わりに近づくにつれてしだいに優位になってきた。それは、記号の形式と内容の峻別であり、純粹な形式へと関心が傾いたことである。内容は記号の決定にまったく寄与しないし、また、記号の形式は「意味に影響することなくそれを伝達するための、盲目的な乗り物」になってしまった (Parmentier, 1985, p. 45)。

意味の意味についての独創的な著作のなかで、オグデンとリチャーズ (Ogden & Richards, 1923) は、その出発点として、次のような図式を提示している (図 2・1)。

彼らは、三角形の底辺——つまり、シンボル<sup>(1)</sup>(言葉)と指示対象(モノ)の関係——のもつ特殊な性格を指摘している。

シンボルと指示対象とのあいだには間接関係以外にとりたてるべき関係はない。その関係は誰かがシンボルにある指示物を表させるときに生ずる。言いかえれば、シンボルと指示対象とは直接に連結されているのではなく(…)、ただ三角形の二辺を廻っての間接関係であるにすぎない。(Ogden & Richards,

1923, pp. 11-12)

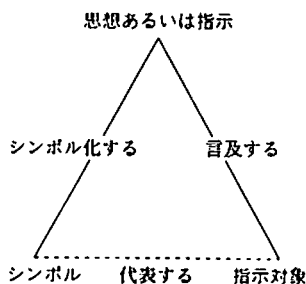


図2・1 思考、言葉、モノの三者関係としての意味  
(Ogden & Richards, 1923, p. 11)

この引用が意味しているのは、シンボルとそれが象徴するもの、あるいは言葉とモノとのあいだには直接的な対応はない、ということである。両者の関係は、常に人間によって構成されるのであり、したがって歴史的に変化するものなのである。

しかしながら、言葉とモノとのあいだに直接の意味関係があるという従来の定説に代表される一種の単純化こそが、思考が会うほとんど一切の困難の源だということに気づくべきである。(Ogden & Richards, 1923, p. 12)

このように、意味とは構成体である。意味の構成は、人間に固有な活動のタイプである。

しかし、オグデンとリチャーズはパース流に、シンボルと指示対象の関係の構成を、もっぱら純粹に思考過程、つまり個人の心的行為としてとらえている。彼らはさらに、モノやアーティファクト一般のなかにはなく、もっぱらシンボルと言語のなかに埋め込まれ具体化されたものとして、意味を

見ている。そのために彼らの理論は、思考やシンボルや言語の発生の問題に対しては無力なのである。また、オグデンとリチャーズが、間接的・媒介的の性格を三角形の底辺の部分だけに限定していることも彼らのこうした制約をよく表している。他の二つの関係——思想とシンボルの関係、思想とモノの関係——は、「程度の多少はあれ直接的」(Ogden & Richards, 1923, p. 11) だと見なされている。

だが、これら二つの関係は本当に直接的なのだろうか。まず、思想とシンボルの関係について考えてみよう。シンボルは、社会・歴史的に産み出され伝達されるアーティファクトである。それらはモノとしてのツールと対象を生産し使用するなから抽象され一般化された。ある個人とシンボルの関係は、一見直接的にみえる。しかし、シンボルの文化的発展は、直接的・個人的な見方によって理解できるものではない。それは、対象(指示対象)を介した、主体とシンボルとの媒介的・間接的な相互作用にもとづく、個人を超えた集合的な過程である。一方、個人がシンボルを手にし使用するようになるのは、シンボルが指示し、またそこに由来する対象世界との実践的な出会いのなから生じるのである。

言葉やシンボルが実践的なモノとかかわる行為から発生するということは、オグデンとリチャーズの著作への補遺のなかでマリノフスキーが指摘している。

未開人がある単語の意味を了解するときの過程は、説明、すなわち一連の統覚作用によるのではなく、その取り扱い方を知ることによる。単語は、それを母語とする人にとって、それが表すモノの適切な用法を意味する。(…)。(Malinowski, 1923, p. 321)

単語の眞の知識は、ある場のなかで、それを適切に使用することによってえられる。言葉も人間の作った用具の例にもれず、それが使われたのち、しかも、あらゆる種類の条件下で適切に用いられたのち、はじめて意味あるものとなる。(Malinowski, 1923, p. 325)

このテーマを精緻化したのは、歴史的にも理論的にもレオンチェフ (Leont'ev, 1981, 特記 pp. 219-220)、ルロワ・グーラン (Leroi-Gourhan, 1980, 特記 pp. 147-153)、チャン・デュク・タオ (Tran Duc Thao, 1984) である。認知心理学では、ダイウィット・マクニール (McNeill, 1985) が最近、身振りと話しことばの共通の起源について論じている。もっとも説得力のある実験的資料は、盲聾哑児の教育に関するメシユチェリヤコフ (Meshcheryakov, 1979) の研究にみられる。ヘレン・ケラーの発達の場合はしばしば、内に眠っていた精神的本質の展開とされるが、彼は再評価を行い、その本来の意味を新たにした。

ちようどこういう状態のときに教師アニー・サリバンが到着したのである。サリバンの到着時には、ヘレンは家のなかや庭のこと、近くの畑や家の近辺のことは何でもわかっていて、自由に歩きまわることができるようになっていた。キッチンや邸内の家具調度・用具・什器のことは心得ていて、身近にある品物の用途を知っているし、正しく使用することができた。身振り言語が発達していて、(…) 広範かつ体系的に使用していた。ヘレン・ケラーの最初の教師は誰かといえ、それは黒人少女マーサ・ワシントンであったとも言えるのである。まさにマーサこそ、盲聾哑児ヘレンをとりかこむ孤独の壁を打ち

破りはじめた人であり、ヘレンは彼女との交流を通じて身振り言語を習得したのである。ところが、サリバン先生自身も、その教育を心理学的立場から分析しようとした後の時代の研究者たちも、この時期におけるヘレンの生活状態が重要な意味をもっていたとは考えないし、ましてや決定的意味をもっていたとも言っていないことを指摘しておく必要がある。(Mecheryakov, 1979, p. 60)

思想とモノの関係も、これと似た流れで分析できる。モノは、思考されたり指示されたりするため、ただそこにあるのではない。モノは、集団的な生活活動のなか、実践のなかで、人間によって生産され使用される。このことは直接行われるのではなく、常に、モノの質や振るまいに関するシンボル（つまり、ツールやモデル）の助け——目に見える場合も見えない場合もある——をかりて行われる。再び、人がモノを指示する場合を見てみると、一見、人は対象と直接的関係をもっているかのように見える。しかし、指示するという行為は、常に何らかの手段——身振り、絵、言葉、他の対象など——を使ってなされるのであり、その手段は少なくとも他者に対して伝達可能で理解可能でなければならぬ。この行為は、自動化されている場合でさえ直接的でない。そこには、主体が意識しようとしまいと、媒介的な文化的道具が確かにあるのである。

オグデンとリチャーズの三角形において主な動きをするのは、いちばん上の頂点、つまり思想である。しかし、思想は、主体の単一の行為でもなければ、主要な行為でもない。何といても、人は実践的に行為する、つまり物質的環境を作り上げる。しかも主体は、ひとりではなく共同でそれを行うのである。

現代の認識論のなかで、カール・ポパー (Popper, 1972) による三つの世界の概念は、もともとよく知られた三項関係だといって間違いない。その基本的立場は次のようなものである。

第一に、物理的世界——物理的存在の宇宙がある(…)。私は、これを「世界Ⅰ」と呼ぼう。第二に、意識の状態、心理学的な傾向や無意識の状態を含んだ心的状態の世界がある。これを「世界Ⅱ」と呼ぼう。だが、さらに第三の世界がある。それは思想内容の世界であり、実際、人間の心の所産からなる世界である。これを「世界Ⅲ」と呼ぼう。(Popper & Eccles, 1977, p. 38)

世界Ⅲの中に、ポパーは、物語、説明的な神話、ツール、科学理論、科学的問題、社会制度、芸術作品を含めている。これらのものは多くの場合、モノとしての形で存在している。しかし、モノとしての側面は本質的ではない。世界Ⅲの実体は、非物質的・非具体的な形態でも存在しうる。このようなものの主な例は、科学的なそれに代表されるさまざまな問題状況である。ポパーによれば、問題状況は、人が意識するとしなにかかわらず、知識群のなかに客観的に存在する。したがって、課題はそれを発見することである。世界Ⅲの諸物を把握することは、そうした諸物の物質的な具体化とはまったく独立したことであり、ポパーは主張する。

(…) 理論とその論理的関係とはともに世界Ⅲの対象であり、一般にそれらの対象が具体化されているかないかは、世界Ⅲの対象としての性格にも、それらの世界Ⅱでの把握にも何ら差異を生じない。し

たがって、未だ発見されていない、そしてまだ具体化されていないある論理的問題状況が、私たちの思考過程にとって決定的だということもありうるし、そしてそれが出版というような、物理的世界に反響を及ぼす行為に導くこともあるだろう。(Popper & Eccles, 1977, p. 46)

しかし、問題や論理的可能性といえどもある種の言語で固定されねばならない、ということは確かである。ポパーもこのことは認めている。しかし、それでもなお、世界IIIのものは具体化されていない。なぜなら、言語そのものが具体化されていないからだ。

言語は非物質的であり、もっとも変化に富んだ物理的形態で——つまり、物理的な音という非常に異なったシステムの形で——現れる。(Popper & Eccles, 1977, p. 49; 強調は引用者による)

言いかえれば、ポパーは、後期パース流に——ポパーはパースを「あらゆる時代を通じてもっとも偉大な哲学者のひとり」(Popper, 1972, p. 212)と見なしている——、内容と形式、非物質的なものと物質的な乗り物 (vehicle) との絶対的分離を主張するのである。このため、彼は、三つの世界の互いに独立した性格について、繰り返し論じることになる。この点でも、ヘレン・ケラーについての記述がポイントをよく示している。

健全者は誰もが話す。会話はそれらの人々にとってもっとも大きな重要性をもっている。ヘレン・ケ

ラーのような聾、啞、盲という三重苦の少女にも同じく重要である。彼女は熱心に、そしてすみやかに会話の代わりとなるものを習得し、英語と文学を完全に自分のものとした。物理的には、彼女の言語は話される英語とは非常に異なっていた。だがそれは、書かれた、または印刷された英語と一對一の対応をもっていた。彼女が英語の代わりに何か他の言語を習得することもできたことに疑いはありえない。無意識的にせよ彼女が切に求めたものは、言語——抽象的な意味における言語——であった。(Popper & Eccles, 1977, p. 49. 強調は引用者による)

この世のさまざまな内容や形式と分かち難く結びついたヘレン・ケラーの初期の身振り言語でさえも「非物質的」であると、ポパーは考えるのだろうか。おそらくそうなのだろう。

ポパーによれば、「三つの世界は、初めの二つが相互に作用でき、後の二つも相互に作用できるというかたちで関連しあっている」(1972, p. 155)。言いかえれば、彼は、三つの世界間の非連続的な関係を仮定しているのである。彼は、三角形を二つの二項関係へと還元する。これはパースが、ピリアードの球の動きのような純粋に機械的な動きの領域でのみ正当と考えたことである (Parmentier, 1985, pp. 25-26)。

この二項関係へと還元する考え方は、ポパー理論でもともと意図されていた相互作用的・システムの性格を、事実上破壊している。現実の実践的な運動、つまり活動としての媒介関係の代わりに、私たちはそれぞれ自律した生を営む三つの世界に住みながら、なじみの主体・客体の二項関係へと入り込む。そこでは同時には、他のひとつの世界だけがあることになる。こうして世界IIIの理論は、たん



に存在するだけでなく自律的に作用しながら、「意図も予期もされていなかった新しい問題、自律した問題、発見されるべき問題を創造する」(Popper, 1972, p. 161)。言いかえれば、問題状況は世界Ⅲのなかにしつらえられている——あるいは、貯蔵されているということもできよう。

活動の観点からすれば、これはナンセンスである。問題状況は、静的にしつらえられても貯蔵されてもいない。むしろ、三角形の運動のひとつの本質的なかたちであって、三つの「頂点」すべての内部、そしてまたそれらのあいだで、構成され立ち現れるものなのだ。

ポパーも確かに活動について語っている。「理解」という活動は、本質的に第三の世界のモノを操作することのなかにある」(Popper, 1972, p. 164)。この二項的な概念把握では、世界Ⅲのモノがいかにして、くりだされるのかを説明できない。世界Ⅰから引き離されているという、よく言われる意味においてだけでなく、活動は常に三項的であって生産的な性格をもつ、ということを、実践的にとらえることができないという、より重要な意味で、理解はたんに世界を受け入れるだけの主知主義的活動になってしまっている。

生物学者で認識論者でもあるR・C・ルウォンティンは、ポパーの「進化論的認識論」の立場をうまく要約している。

ポパーにあつては、科学と自然、個人と現実世界は、互いに無縁なものとして(……)。各々が自律した過程をもっているのである。外的世界は、部分的には、自然の永遠の法則をもつ固定した現実であるが、部分的には、宇宙や地球上の進化の物理的過程によって進化する。(……) 他方、生物は、新奇さ、

「推測」をもたらす、自律した変異の過程をもっている。それらの発生も普遍的な分子的・物理的な力の現れであることはもちろんだが、それを除けば、外的自然との特別なつながりはない。有機体の自律的変異や外的自然の自律的状态は、一方向的な過程によって結びつけられており、そこでは有機体の変異によって特徴的な生存のかたちをみせながら外的自然に適応していく。これとまったく同じように、人の心もまた、推測によって新奇なものを生むが、外的世界によって反駁されるのである。(Lewontin, 1982, pp. 163-164)

こうした批判の後に残るものは何だろうか。活動の理論を導いた第一の思潮は、媒介された構成としての知識と意味という基本的な観念を提供した。ポパーでさえ、これを認めている。

私の見解によれば、世界Ⅲの対象を把握する作用は能動的な過程として理解できる。私たちは対象の作成、再創造としてそれを説明しなければならない。難解なラテン語の文を理解するために、私たちはその文を解釈し、どのようにそれが作られているかをみて、それを再構成したり、作り直したりしなければならぬ。(Popper & Eccles, 1977, p. 44)

だが、第一の思潮の諸理論は、人間の活動を個人の知的理解へと矮小化してしまふ。物質的文化が共同活動のなかでどのようにして創造されるかを把握するための手がかりは、ほとんど与えてくれない。

### 3 「第二の思潮——ミードからトレヴァーセンへ」

活動の理論へ向かう第二の思潮の端緒を開いたのは、G・H・ミードの「社会的行動主義」であった。ミードの理論は、個人主義と主知主義の克服をめざすものであった。

私たちは社会心理学において、社会集団を構成している個々の個人の行動によって社会集団の行動を検討しようとするのではない。そうではなく、一定の複雑な集団活動の社会的な全体を出発点とし、そのなかに（その要素として）それを構成している個々の個人の行動を分析しようとするのである。（…）

社会心理学において、私たちは社会過程を、外側からと同様に内側からもとらえる。社会心理学は、観察可能な活動——力動的に進む社会過程、その構成要素からなる社会的な諸活動——から出発し、科学的に分析するという意味で行動主義的である。しかしそれは、個人の内的な経験、そうした過程や活動の内的な局面を無視するという意味で行動主義的なのではない。逆に、社会心理学は、全体としての社会過程のなかで、そのような経験の発生にとりわけ関心をもつ。社会心理学はただ、内部から外部にではなく、外部から内部へと探究するのである（…）。（Mead, 1934, pp. 7-8）

ミードのアプローチはふつう、「シンボリック相互作用論」あるいは「シンボル媒介的相互作用論」

(Joas, 1980) と呼ばれている。このアプローチの中心的考え方のひとつは、物理的対象より、社会的対象や社会的意識を優先させることである。

社会過程は、コミュニケーションをしながら、ある意味でその過程に参加している個々の生物体の経験の領域に新しい対象を生み出す。有機的な過程や反応は、ある意味で、それら自身が反応する対象を構成する。すなわち、どのような生物学的有機体もある意味で、それが生理学的にまた化学的に反応する対象を（対象がその生物体に対してもつ意味という意味で）生み出している。たとえば、食物——食べられる対象——は、それを消化できる生物体が存在しなければありえない。同様に社会過程は、ある意味で、それが反応し、あるいはそれが適応する対象を構成する。すなわち、対象は、社会過程に加わっているさまざまな生物体の相互反応、あるいは相互作用への相互適応を通しての経験や行動の社会過程における意味との関連において構成される。この適応は、社会過程の進化の低い段階では身振りによる会話のかたちで、その進化の高い段階では言語というかたちでおこるコミュニケーションを手段として成立する。(Mead, 1934, p. 77)

物理的対象のこの社会的・相互作用の構成は、シンボルを通してなされる。

シンボル化作用によって、それ以前には構成されなかった対象が構成される。この対象は、シンボル化作用がおこる社会関係の文脈なしには存在しない。言語は、まえもってあらかじめそこに存在する状